

「封筒」消印 4.11.1

表…大阪市外阪急沿線岡町寶通一丁目

宇井 縫藏様

和歌山縣田辺町 中屋敷町三六

南方熊楠再拝

裏…封

「本文」

昭和四年十月卅一日 夜十二時

宇井縫藏様

南方熊楠再拝

拝復 卅日出御状今日午後一時拝受。今夜用事あり

外出、多屋孫にゆきしに貴著は（植物誌の方）未だ著<sup>1</sup>

荷せざれど、もはや五十部購買の申込み済たりと

の事なり。扱小生は例の病人の為め目下頗る取込み

居り、今月十四より十七日に渡り兵生及神島で見

出せし珍異の菌類を今に少しも記図し得ず、もはや昨今

の大雨にて悉皆腐り了りたることと存候て、其始末もせざる可

らず、随分多事なれども左迄骨の折れぬこと故、さし出がま

しき乍ら申上るは、今回の

貴著二つとも廣告に先立ち 進献しては如何にや。

小生今村侍従武官と面識無れども、今年二月拙宅を

訪はれたることあり。<sup>2</sup>（小生妹尾下山に創<sup>3</sup>つき臥し居て、面會

を得ざりし）、又其甥とは別懇なり。鈴木海軍大将<sup>4</sup>

---

<sup>1</sup> 着の意で書いている。

<sup>2</sup> 実際に訪ねてきたのは、今村均（当時陸軍中佐）だった。熊楠はこの時、「予不快にて面会せず」と記している。熊楠は今村信次郎（一九三〇年（昭和五年）に海軍中将）と勘違いをしている（今村信次郎は一九二九年三月に行幸予定地の調査のため軍艦で田辺湾に来ているが、熊楠を訪問してない）。引用参考…岸本昌也「（一）今村均・渡辺篤」『熊楠 works』 書簡の社 No.34

<sup>3</sup> キヌ

<sup>4</sup> 鈴木貫太郎（一八六八年一月十八日〈慶応三年十二月二十四日〉—一九四八年〈昭和二

(侍従武官長) は前日御召艦にて面知せることあり。甚だ小生を好遇され候。付ては今村氏へ特別に貴下多年の辛苦をのべ、又これほどの地方生物誌は皆て例あらざるものなることをのべ、殊に今年当縣進献品と對照して御研究室にて御参考品ともならば、其便宜少なからざる由をのべて今村氏より鈴木大将を経由し、御手許へ進献の儀を頼み上れば多分事叶ふべしと存候。然し貴下よりもはや他の人を通じて進献の手續きに及ばれあらば、事重疊して徒らに煩きを累ぬる<sup>かま</sup>訳故、彼れ是れ申上べきに非ねど、もし小生より今村氏に頼み遣はして宜しく御はば、状一本出せばよきこと故、早速其旨御返事被下度候。小生はいかに家累多きも、決して凝滞なく同氏と同氏の甥(渡部篤<sup>ワタベツトシ</sup>)といふ若き植物学者にて、小石川教室にあり、去年拙宅へ宿れり)え申し出べく候。かくて賜天覧の三字を加へ得ば、廣告にも光彩を添え又地方で賣出すにしても大に威勢宜しく候。尤も不都合なることは、魚譜の方は今に宮城へとどき居らざる様に候。玉置三七<sup>タケ</sup>氏より小竹氏に渡せし分は誰かの手に渡りそのままと成たらしく、小生必死に成り進献すべく(御前進講の際)求めしもどこにも一本もなく、小生手許にあるは例の悪筆にて多く書き入れあり、又至つて手すれきたなかりし故、進講の際献上を得ざりし。故に此際二つとも進献が宜しと存候。尤も取次ぎ賃に二種共二三部づつ(進献本の外)に贈呈することと御心得被下度候。以上申上候。次にモミランの産地川又を削る。

三年〈四月十七日〉

<sup>5</sup> 渡辺篤 今村均の義理の甥。当時東京帝国大学植物学教室の大学院生。昭和三年に南方邸を訪問。「(一) 渡辺篤」『熊楠 works』 書簡の社 No.35・36

<sup>6</sup> 玉置三七郎。白浜自動車会社副支配人 広川英一郎「玉置三七郎宛南方熊楠書簡に關しつ」熊楠 WORKS No.43 2014年4月1日

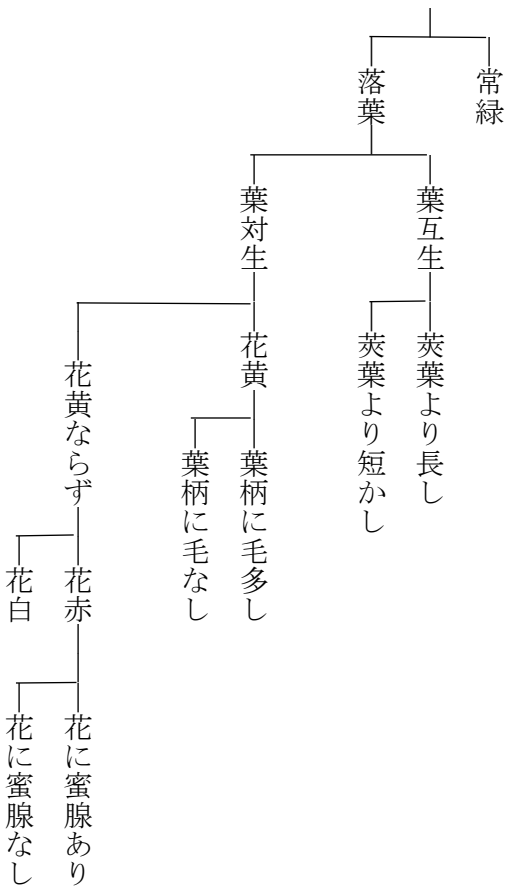
<sup>7</sup> 小竹岩楠。白浜自動車会社社長。玉置三七郎は小竹の女婿。

キチジャウソウ の産地和歌浦を加ふ。

前書申上候通り ツルツゲ 如き(捨ひ子谷、兵生、川上村、川又等々)

少なからざるものを逸せられしは不審に堪はず。

小生は次回に貴下が二分法



といふ風に風つぶしにしらべ行かば、紀州の既知の植物は必ず学名を尋ねあつるべきものを、薄き冊子にて表紙は自由に捲き曲げ得てポケットに

挟み入れ得るものを安値で賣出さんことを望む。これは採集家必携と

でも題せば必ず多く售ることと存候。小生若いとき外国に在りての経験に

莎草科<sup>26</sup>禾本科<sup>27</sup>穀精草科<sup>28</sup>燈心草科<sup>29</sup>菊科唇形科<sup>30</sup>又蘭

科の多き地にこんなもの無くては、實際どんな詳細な説明や図解

が在ても忽ち実用の効は挙げ得ぬことと判り候。これは隠花植物

を集むる人々に緊要なるは言ふを俟たず。小生昨今山野で色々の

菌をとりてその菌の寄生主の名を定め得ぬので、甚だ漠然と

或る禾本科の葉に付く、燈心草の一種につく杯と書付るのみ。

∞ 蚊帳吊草(カヤツリグサ)科

◦ イネ科

◦ ホシクサ科

◦ イグサ科

◦ シン科のこと。花卉の形状からクチビルバナ科とも呼ばれた。

後日その葉や茎を見て何の種と判ずるは、それぞれの専門家といへども  
出来ぬこと多く、誠に歎息の外なし。 早々以上。